

子どもを伸ばす4つの視点

日々の教育活動において、多面的な児童生徒理解に基づく子どもとの信頼関係を基盤に、次の4つの視点から生徒指導を意図的に行うことが、一人一人の成長を促します。

児童生徒理解 ↔ 信頼関係

子どもと教師との厚い信頼関係を築く基盤は、児童生徒理解です。子どもと積極的にかかわり、一人一人の子どもや学級集団の実態・状況を多面的に把握し、とりわけよさを理解することが、生徒指導の基本です。

全教職員がすべての子どもに関心を持ち、長所に目を向け、変化を見逃さず、日常的に情報を共有するシステムをつくるのが大切です。

目的意識

なりたい自分があり、取り組みたいことが明確な子どもは、今、何をすべきか考え、自律的に行動できます。明確な目的意識は、それに向かって挑戦するエネルギーとなります。また、それを達成することが成就感につながります。

達成度が明確な目標を子どもと共有し、その達成に向けて支援していくことが大切です。

自己決定

個人や集団の目標達成・課題解決において、根拠を基に適切に判断し、自己決定することが、子どもの主体性を高めます。また、責任感をもって取り組み、やり遂げた達成感を味わうことが、自立に向けた成長を促します。

子どもが事実を基に的確に状況をとらえ、自分の目標、集団に共有されている価値に照らして適切に判断できる状況を設定します。

個性・能力

自分の個性・能力が発揮されてこそ、学習や活動に主体的に取り組むことができます。集団の中で自分らしさを発揮できた子どもは自己存在感を味わい、集団の期待を受け、さらに力を発揮しようとしめます。

子どもが自信をもって自己表出できる雰囲気を醸成するとともに、的確な児童生徒理解に基づき、一人一人に期待し、それぞれが生きる場面を意図的・計画的に設定していきます。

協同性

一人一人が大切にされる風土の中で切磋琢磨し合うことで、集団の成長とともに個々の社会性もはぐくまれていきます。他者の考えや言動から学び、互いに認め合い、支え合いながら力を合わせることが大切です。苦楽を共にしながら課題を解決し、目標を達成することで、自分が高まり、集団がまとまり、絆も深まっていきます。

相互作用を通して学び合う協同活動、様々な人々とかかわったり交流したりする活動を計画的に位置付けます。

全校体制で取り組むポイント

校長のリーダーシップのもと、全教職員がアイデアを出し合い、自校の生徒指導の方針と具体的な方策を共通理解し、チーム一丸となって取り組むことが重要です。教職員が、**目標を明確にし、何ができるか考えて自主的に行動し、自分らしさを発揮し、同僚同士で高め合い**、日々情報交換しながら「風通しのよい教務室」をつくりましょう。

Research

1 各種調査等の客観的なデータを基に、自校の子どもの**実態を分析**する

Vision

2 どんな子どもに育てたいのか、**目指す児童生徒像**を明確にする

Plan

3 校内組織(校務分掌)、指導の重点、具体的な方策、スケジュール、評価方法等、**生徒指導全体計画**を作成し、共通理解する

Do

4 全教職員が、**日々の授業、学級経営の中で実践**する

Check

5 子ども**の実際の姿や客観的な情報**を基に、**取組の成果と課題**を明らかにする

Action

6 **改善策、新たな手だて**を共通理解する

例【生徒指導、特別支援教育の窓口からも授業を語り合う】

A小学校は、教科のねらい達成を目指す日々の授業の中で、様々な個性や特性を持った子ども同士がかかわり合って学びながら、「互いのよさを認め合う子ども」を目指したいと考えました。そこで、全員が取り組む研究授業の指導案に、生徒指導と特別支援教育を窓口にした手だてを必ず記述するようにしました。授業後の協議会で「互いのよさを認め合う」ための手だての有効性も協議しています。

例【目指す生徒像を明確にし全教職員で一丸となって取り組む】

B中学校では、客観的な実態調査の結果から、自校の生徒に最も身に付けさせたい力を「他者と積極的にかかわる力」とし、全教育活動の中で「かかわり」「人間関係」に重点を置くことにしました。そこで、学校行事、生徒会活動、学級活動の年間計画に「望ましい集団活動」をPDCAサイクルで位置付けました。また、全教職員が、「リーダー集団の育成」「合意形成のための話し合いのスキル」を常に意識し、日々の授業や教育活動に当たっています。

本紙は、日々の教育活動の中で、全教職員が全員の子どもの対象に、自校の生徒指導の方針を意識して取り組むことを願って作成しました。生徒指導の窓口から、日々の学級経営、授業、特別活動等で推進する取組の例を示したものです。「新潟市の授業づくり」リーフレットと併せてご活用ください。指導主事訪問、教育委員会主催の研修会の際にも活用しますので、ご準備ください。

新潟市が推進する生徒指導の取組

子ども一人一人の成長を促すために

新潟市は全教職員で次のような子どもを育てます

- ◇めあてをもち、自己決定し、自主的に行動する子ども
- ◇互いに認め合い、支え合い、高め合う子ども



新潟市が推進する 生徒指導の取組

子ども一人一人が精神的、社会的に「自立」していくためには、社会の一員であることを自覚し、他者との望ましい関係の中で自分を高めていくことが大切です。そのために、「自律性」(めあてをもち、自己決定し、自主的に行動する)と「社会性」(互いに認め合い、支え合い、高め合う)の育成を目指す必要があります。

新潟市では、子ども一人一人の成長を促すために、次のような生徒指導の取組を推進します。

子ども一人一人の成長を促す生徒指導

- ◎子どものよさを**多面的に理解**し、一人一人の子どもと教師との信頼関係を築く
- 全教育活動を通して、**すべての子ども**に「自律性」「社会性」を育成することを目指し、4つの視点から意図的・計画的な指導に取り組む
- 全教職員**が当事者意識をもち、組織的に取り組む

めあてをもち
自己決定し
自主的に行動する

自立

互いに
認め合い支え合い
高め合う

自律性

社会性

子どもを伸ばす4つの視点

信頼関係

目的意識

自己決定

個性・能力

協同性

児童生徒理解

子ども一人一人が、夢や希望の実現に向けて常に目標をもち、**自ら判断・決定し、自分らしさを発揮し、人とかかわる**ことを通して、社会の中で、自分らしく、高みを求めて自立する姿を目指して取り組みます。

多面的な児童生徒理解に基づく信頼関係が基盤となります。

- 「4つの視点」については、4頁をご覧ください
- 日常の活動、日々の各教科等、学校行事等の特別活動における取組の【例】を右に示します

【成長を促す指導】すべての子どもを対象に

いつでも、どこでも、どの子にも、**みんなでかかろう**

全教職員・チーム

学校・学級生活(日常の活動)で【例】

一人一人を大切に生かす

目的意識

- 一人一人の日々の取組を認め、次の目標を共に考える

自己決定

- 自分の行為を振り返り、今後どうすべきか考えさせ、決めたことを尊重する
- 目標の達成状況を振り返り、成就感・達成感を味わうことができるよう支援する

個性・能力

- 一人一人の存在感を確かにする教室環境をつくる
- 一人一人の活躍の場を保障する
- 集団に貢献できるように、一人一人の役割を明確にする

各教科等の授業で【例】

目的意識

- 学習の課題を分かりやすく示す
- 分かったこと、できたことを振り返る場面を設定する

自己決定

- 根拠を基に自分の考えをもち、自分なりに判断することを大切にする

個性・能力

- 個の興味・関心、能力に応じた教材、学習場面を工夫する

協同性

- 友達と協力して課題を解決する場を設定する
- 自分と違う考え方や見方を認め合いながら、よりよい結論を目指すことを大切にする



信頼関係

- 子どもをよくみる
- 子どもの話を聴く
- 子どもに寄り添う
- 子どもとかわる
- 1日1回、笑顔で話し掛ける、名前を呼ぶ、ほめる
- いじめや差別につながる言動を見逃さない

〈多面的な理解〉

- 観察(表情)
- コミュニケーション
- 保護者、同僚からの情報
- 客観的データの蓄積

児童生徒理解



学校・学年・学級の風土、集団をつくる

目的意識

- 一人一人の思いや願いを基に集団の目標を設定し、その実現に向けた具体的な取組・活動の方向を示す

自己決定

- 集団の課題解決に向けて、自分がすべきこと、貢献できることを考えさせる
- 自分の意見をしっかりと述べ、他者の意見にも耳を傾け、よりよく判断する場や機会を保障する

協同性

- 互いのよさを認め合う場、頑張りや称え合う場、感謝し合う場を意図的に設定する
- 場面に応じて全員がリーダー、フォロワーの経験をできるようにする
- 人の役に立つ活動を通して、集団としての誇りを醸成する

特別活動で【例】

目的意識

- よりよい集団活動を展開するために一人一人がどうすべきか考えさせる
- 活動の達成状況、成果、課題を明らかにし、子どもと共有する

自己決定

- 様々な立場を理解したうえで、集団としてどう取り組むかの合意形成を図るようにする

個性・能力

- 一人一人の思いや願いを生かす創造的な活動を計画し、子どもが達成感を得られるよう支援する

協同性

- 異年齢でかかわる活動を設定する
- 一人では成し遂げることができない活動、互いのよさを認め合い、連帯感を高めるような活動を組織する

【予防的な指導】気になる変化の見られる子どもを対象に

- 欠席日数、日々の観察等から子どもの事実を速やかに的確に把握し、言動や内面の変化などが見られたら、早めの教育相談、家庭訪問等を実施する。
- 必要に応じて保護者やスクールカウンセラー等と連携し、具体的な未然防止策を組織的、継続的に講ずる。

【課題解決的な指導】課題のある子どもを対象に

- 事実確認、情報収集を正確に行い、校内対策委員会を中心に、具体的対応策を講ずる。
- 関係機関(警察、医療機関、教育相談センター、特別支援教育サポートセンター等)、SST・SSWと連携し、迅速に問題を解決する方策を講ずる。

